

2020 年度八戸学院大学短期大学部「学修成果の把握」調査報告

2020 年 10 月 16 日

八戸学院大学短期大学部 学長 杉山幸子

1. 概要

本学幼児保育学科の学生は保育士資格および幼稚園教諭二種免許状、介護福祉学科の学生は介護福祉士資格の取得を目指して入学する。学生の日頃の学習の成果は定期試験やそれに基づく GPA、実習評価等によって測定され、また、学修成果を示すパフォーマンスもさまざまな機会に披露される。しかし、それとは別に、彼らの在学中の成長をより包括的な視点で把握するため、「学修成果の把握」調査を企画・実施した。

調査の目的は学生の成長実感を把握し、ディプロマポリシーを検証すること、また、結果を授業やカリキュラム等教育活動の見直しに繋げることである。そのため、今年度以降、継続して調査を実施し、学生の 2 年間の変遷を追跡する。

今回の調査結果については各学科教授会において検討し、そこで得られた授業等教育の改善のための意見を本報告書に反映している。

2. 方法

(1)調査項目の作成

各学科において学科長を中心としたプロジェクトチームを編成し、そこで学科のディプロマポリシーを基に評価の観点となる項目を作成した。評価のレベルは 4 段階（入学時を想定した第 1 段階から、卒業時に達していることが望ましい第 4 段階まで）とし、各段階の評価基準を分かりやすい短文で表現するよう、それぞれの観点の主たる担当教員に依頼した。その過程で観点の見直しを行い、評価基準となる文言はチームのメンバーが最終的に推敲した。結果として、両学科とも評価の観点は 17 項目となった。

(2)調査の実施

評価方法は自己評価とし、グーグルフォームを用いて 2020 年度前期の試験期間に全学生を対象に実施した。ここではその第 1 回調査の結果について、1 年生と 2 年生の比較を中心に検討する。これは横断調査であり、かつ 2 年間の学修期間をカバーしていないため、得られる知見もごく限定的なものである。後期の第 2 回調査によって卒業時点での学修成果を確認し、さらに、次年度以降は入学から卒業までの縦断調査を実施する予定である。

3. 幼児保育学科について

(1)結果の概要

幼児保育学科のディプロマポリシーは表1の通りである。

表1 幼児保育学科のディプロマポリシー

<ol style="list-style-type: none">1. 健全で豊かな情操と、保育の基盤となる教養や総合的な判断力を身につけている。2. 保育の専門的知識と技術を有し、子どもの発達過程に応じて豊かな保育環境を構成することができる。3. 保育者としての責務を理解し、他の保育者や専門職者と協働して、子どもの最善の利益を追求することができる。

評価の観点のうち、①～④がポリシーの1、⑤～⑮がポリシーの2、⑯と⑰がポリシーの3に対応している。評価の観点、各項目の評価基準および1・2年生の結果を4～8ページに示す。

スマートフォンのトラブルで3名の学生が回答できなかったため、回収率は98.2%（回答者は1年生82人、2年生83人）、有効回答率は100%であった。

学年による違いを検討するため、カイ二乗検定を行った結果、有意差が認められたのは⑤保育（ $\chi^2(3)=13.04, p=0.005$ ）、⑥福祉・養護（ $\chi^2(3)=7.96, p=0.047$ ）、⑩障がい（ $\chi^2(3)=22.64, p=0.000$ ）、⑪教育実践（ $\chi^2(3)=10.15, p=0.017$ ）、⑫ピアノ（ $\chi^2(3)=25.30, p=0.000$ ）、⑭健康・体育（ $\chi^2(3)=8.77, p=0.032$ ）、⑮言語・文学（ $\chi^2(3)=9.69, p=0.021$ ）、⑯保育者の責務（ $\chi^2(3)=10.47, p=0.015$ ）、⑰他者との協働（ $\chi^2(3)=16.83, p=0.001$ ）の9項目であった。これらについては項目名を囲み文字で示しているが、どの項目においても、2年生の方がより高い段階の評価基準を選択する学生の割合が大きいことが分かる。ただし、残差分析の結果が有意であったのは、障がい、ピアノ、他者との協働のそれぞれ第3段階の評価基準のみであった。

(2)ディプロマポリシーの検証

ディプロマポリシーの2と3に関しては、13項目中9項目において、2年生になると上位の評価基準を選択する学生が増えており、成長実感が高まっていることが分かった。しかし、実際にはカリキュラム上は上位の基準を習得している筈の2年生でも第1段階の評価基準を選ぶ割合がかなり大きい。これについては、特に自己評価の低い学生の場合、何かを習得してもその実感をもちにくい（あるいは、学んだことを実践と繋げ

て理解していない) ののではないかと考えられる。日頃の教育の中で、学生に自分たちの学びの成果を分かりやすくフィードバックする必要があることが認識された。

一方、ディプロマポリシーの1に対応する項目については、学年による差が認められず、教養教育の難しさが窺われたが、この点については今後の調査で経年変化を見て検討したい。また、④の判断力・課題解決力ではむしろ2年生の方が低い評価基準を選ぶ学生が多かったが、これは実習の中で困難な経験をしたことが影響しているのではないかと考えられる。

(3)教育活動の見直し

学年による差が特に大きかったのはピアノ、障がい、他者との協働である。ピアノは昨今では初心者で入学する者が大半を占めるが、本学のカリキュラムでは2年間を通じて必修科目となっており、学生は個別指導の下で継続して課題に取り組んでいる。その成果を確認することができた。これは本学の特徴として、今後も大切にしていきたい。

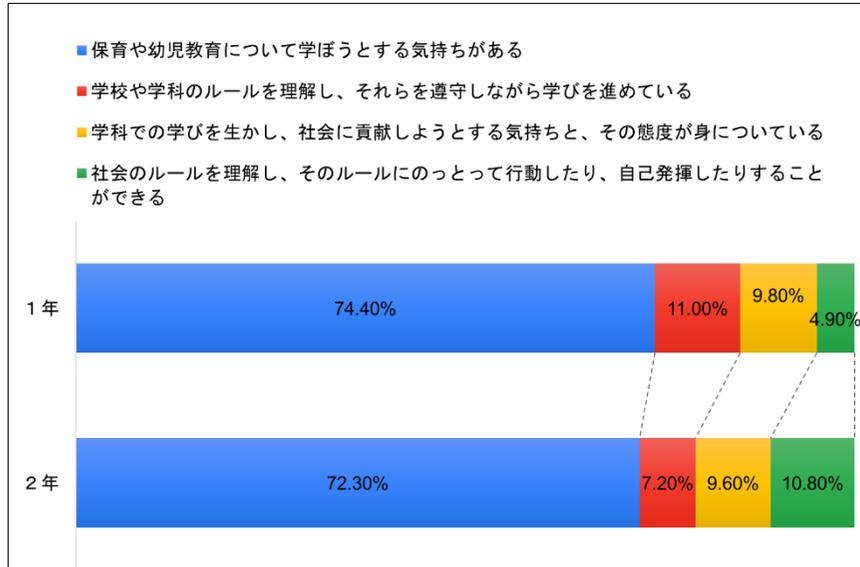
一方、障がいと他者との協働において成長が認められた最大の理由は、1年次の終わりに経験する実習（保育所と施設でそれぞれ10日間）であろう。実習を経験して学生が成長するとはわれわれ教員が日頃感じていることだが、それを確認することができた。学習は理論と実践を重ね合わせて進んでいくため、通常の授業やゼミナールでも子どもと交流する機会を増やすことが教育効果をいっそう高めるのではないかと考えられる。

さらに、今回の調査によってどんな学生を育てたいのかという意識が明確化された、それに向けて自分の授業内容を見直し、工夫と努力を重ねたいという意見が多く寄せられた。

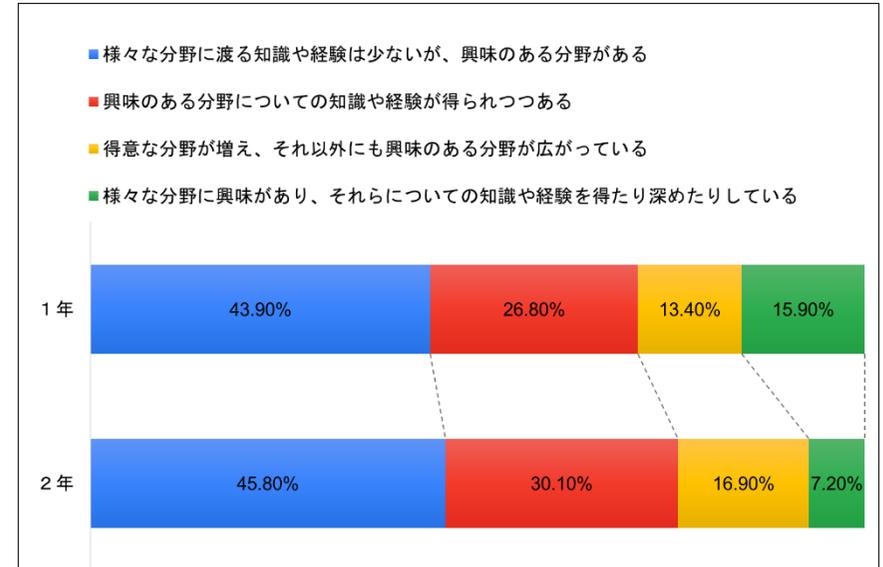
(4)その他

学年間の比較に加えて、法人内の系列高校（保育福祉科）から進学する学生の学びの特徴を確認するため、1年生を2群に分けて比較したところ、保育福祉科から進学した学生はそうでない学生に比べて⑧教育の意義・教育理論と⑮言葉・文学においてより高い評価基準を選択することが多かったが、⑫ピアノについては高校で学んでいるにも関わらず、そうした傾向が見られなかった。これについては高大接続会議において情報共有し、改善策を検討する。

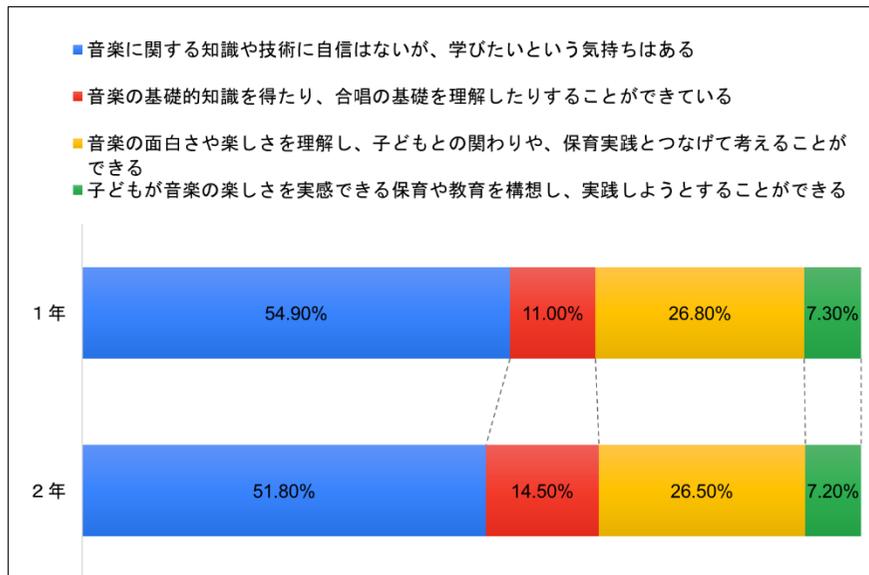
①学びへの態度



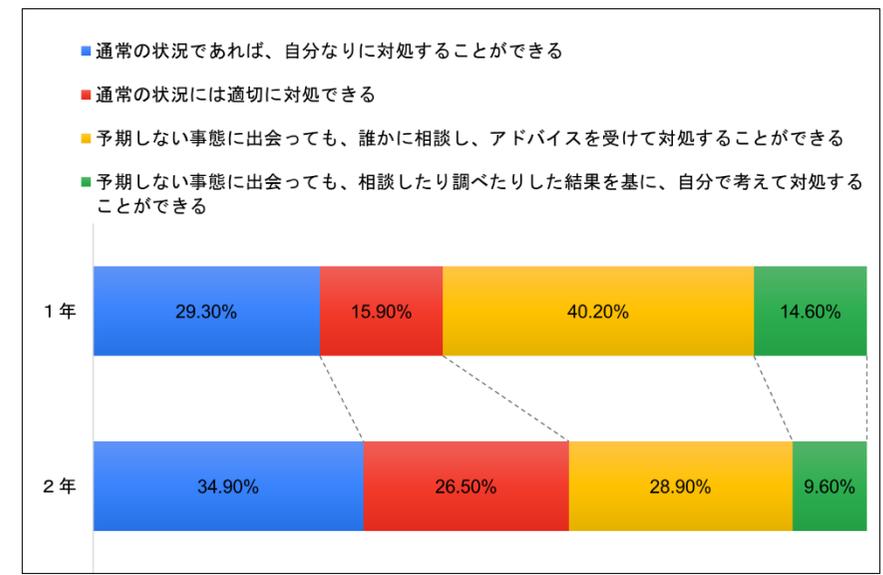
②教 養



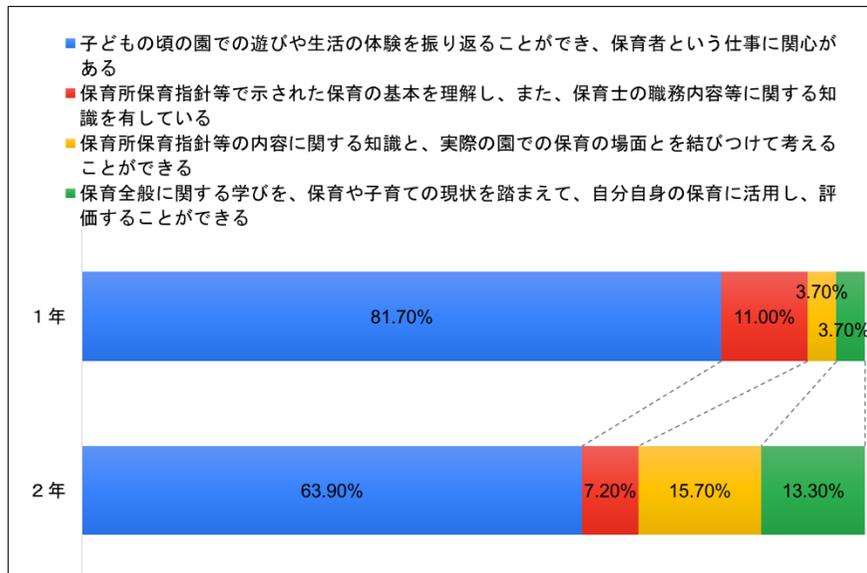
③音 楽



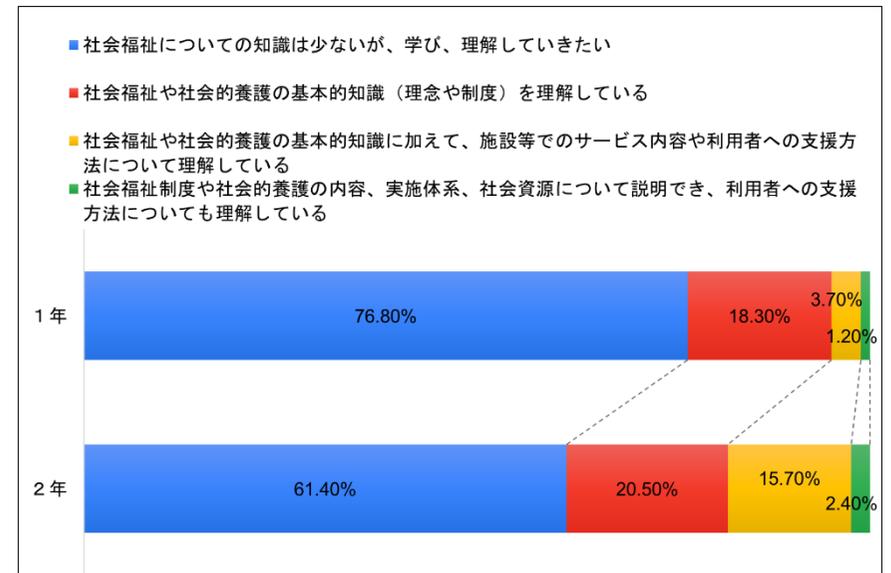
④判断力・課題解決力



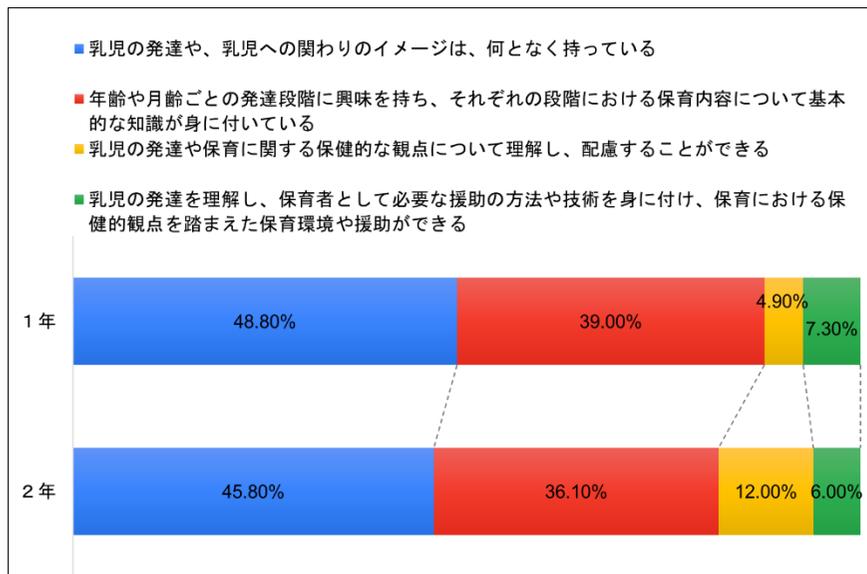
⑤ 保 育



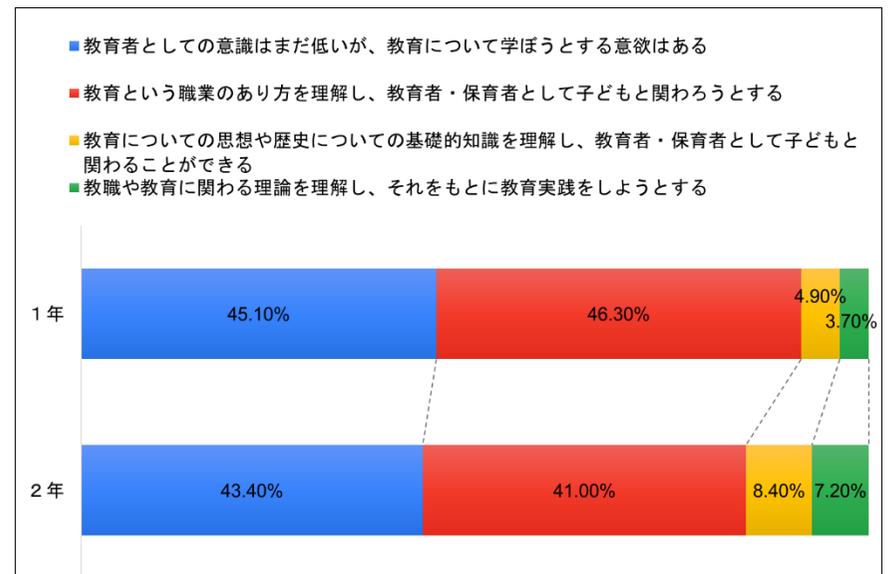
⑥ 福祉・養護



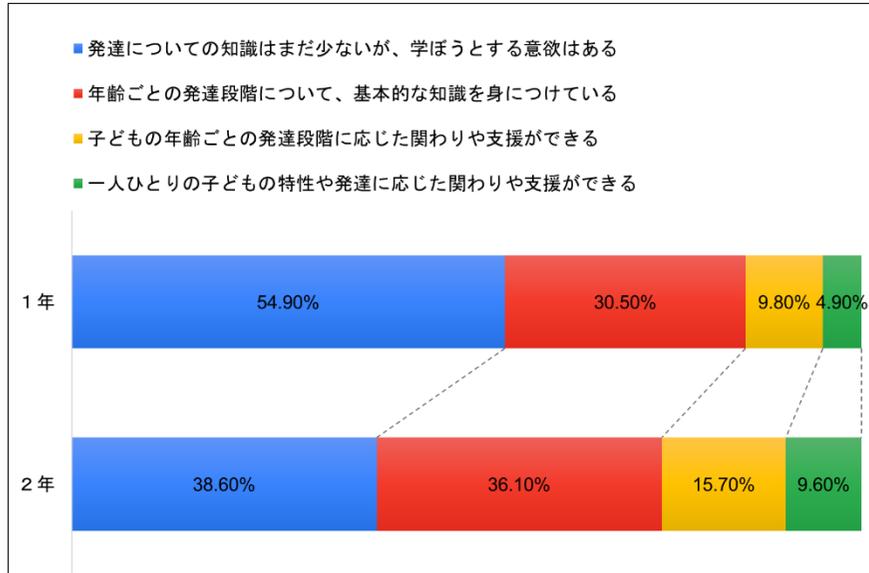
⑦ 乳児・保健



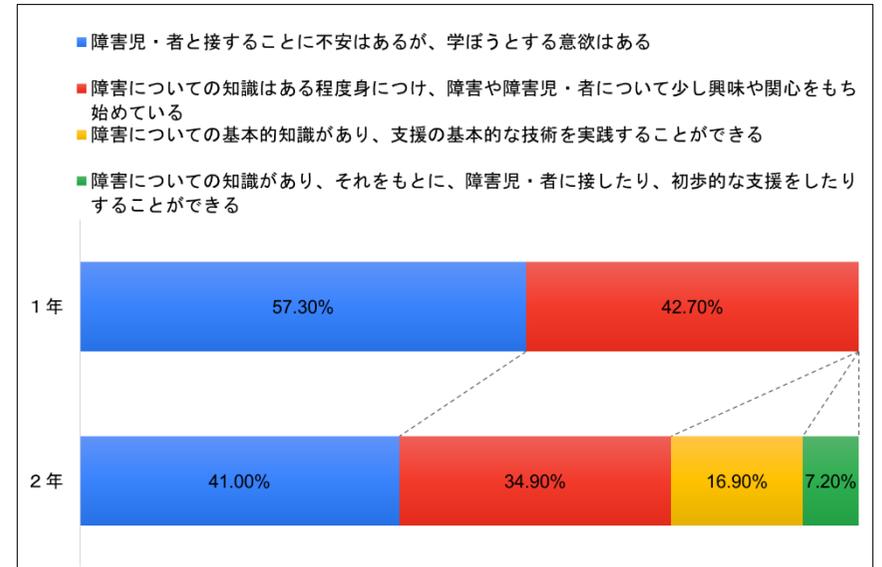
⑧ 教職の意義・教育理論



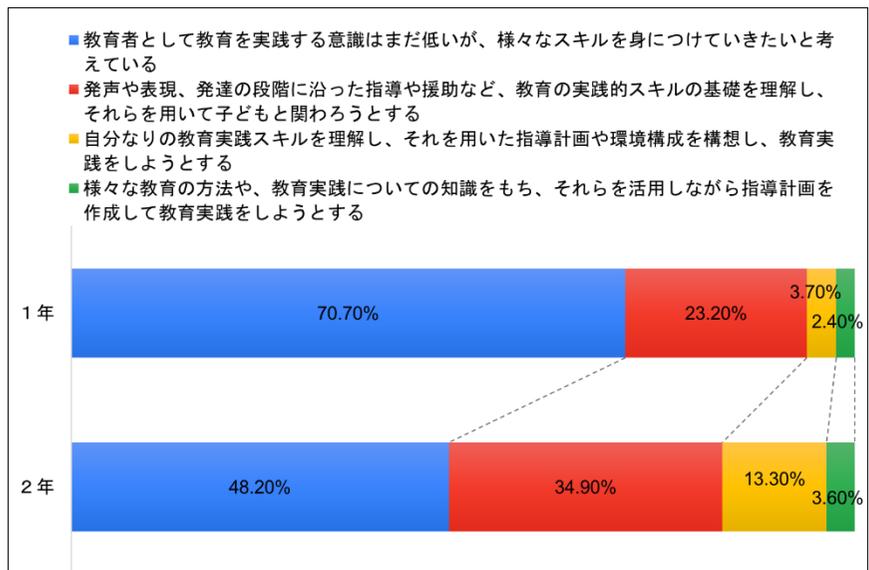
⑨子ども理解



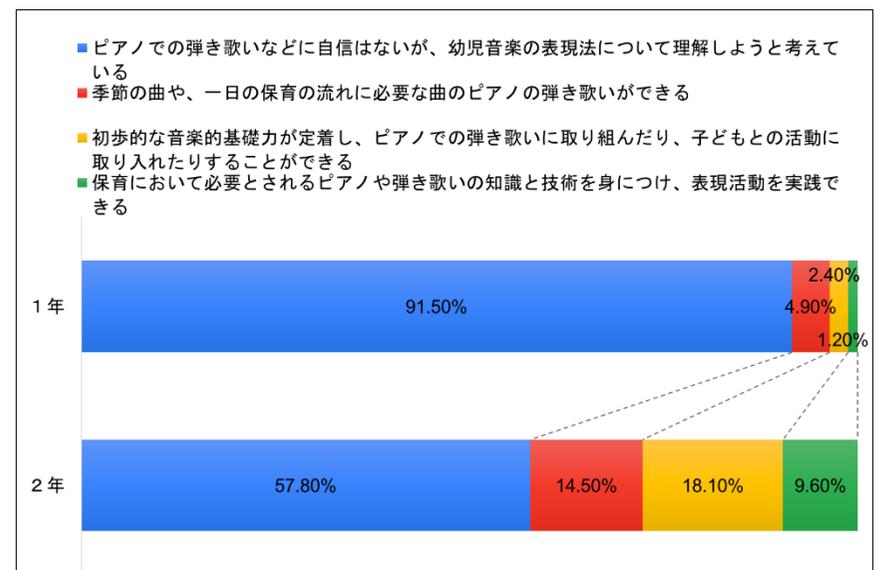
⑩障がい



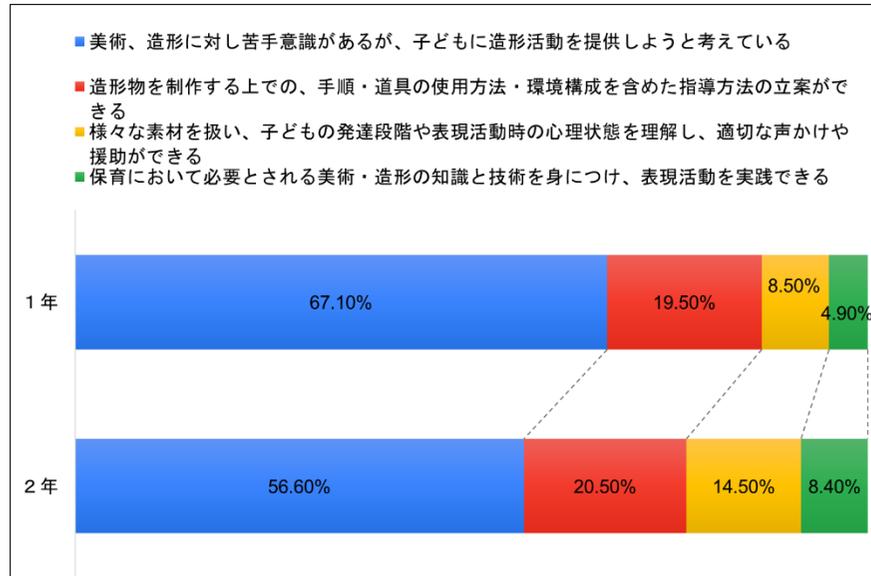
⑪教育実践



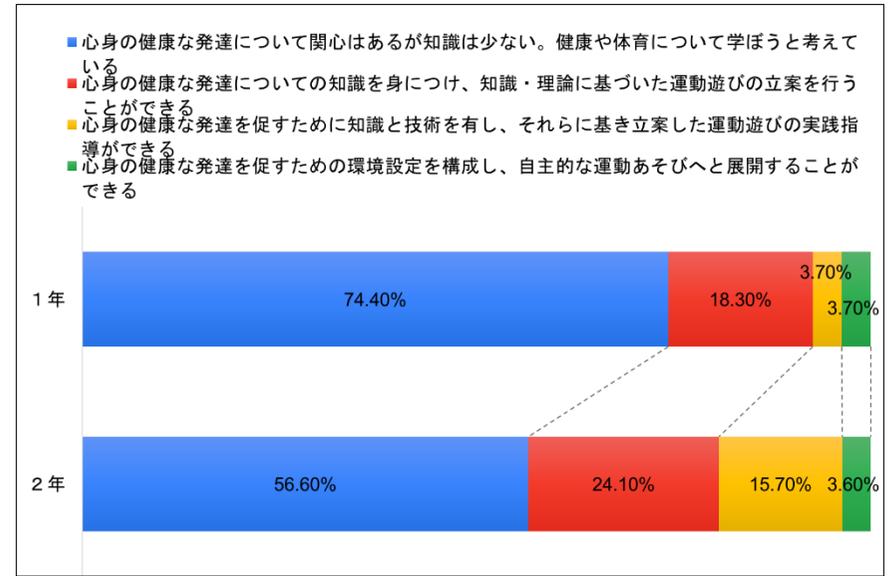
⑫ピアノ



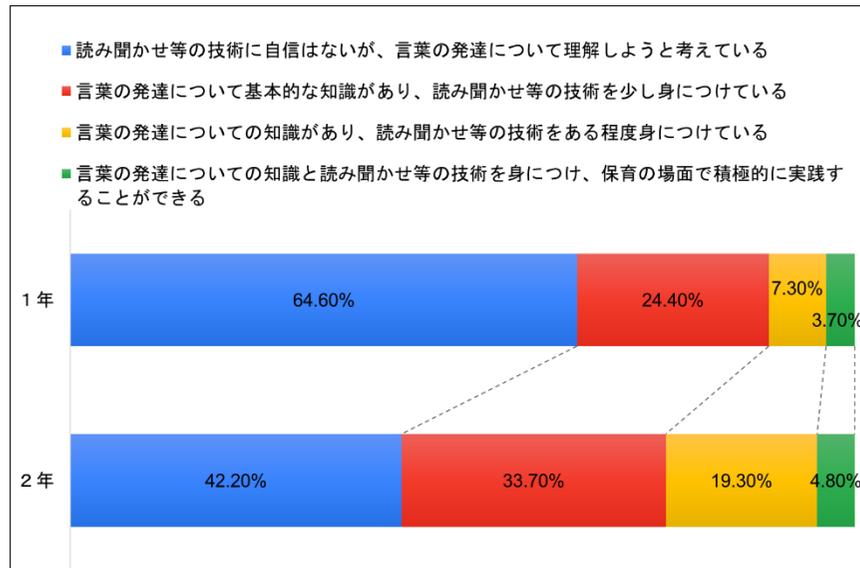
⑬美術



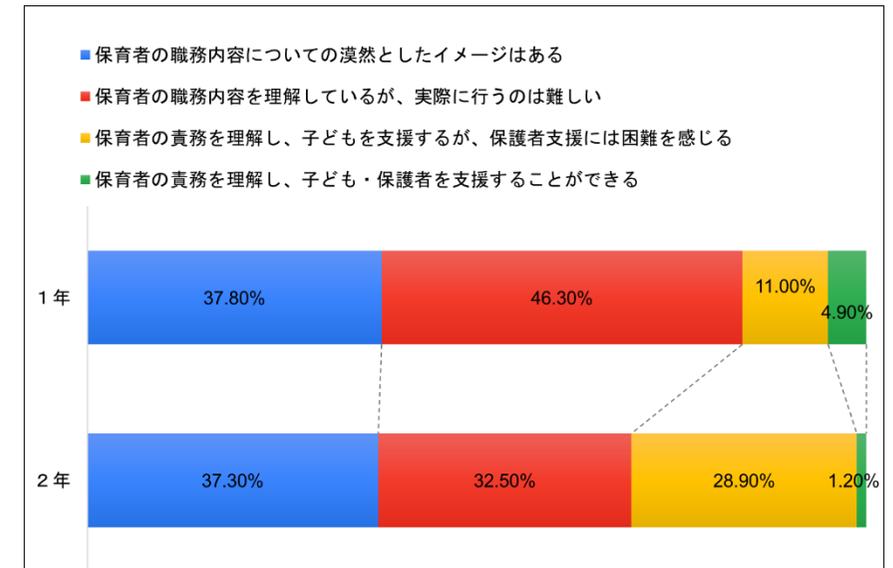
⑭健康・体育



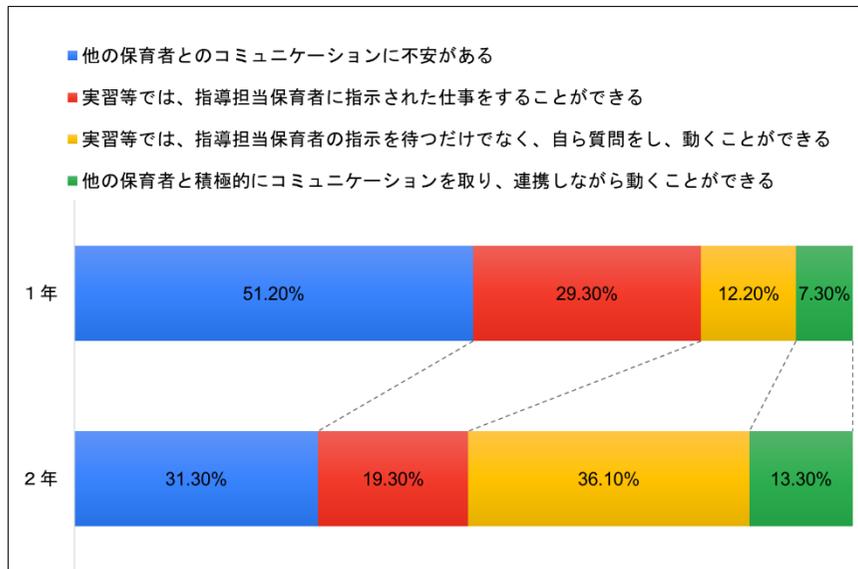
⑮言葉・文学



⑯保育者の責務



⑰他者との協働



4. 介護福祉学科について

(1)結果の概要

介護福祉学科のディプロマポリシーは表 2 の通りである。

表 2 介護福祉学科のディプロマポリシー

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 介護実践の基盤となる教養と総合的な判断力および豊かな人間性を身につけている。2. あらゆる場面に汎用できる介護の知識と技術を有し、自立支援の観点から介護実践できる能力を身につけている。3. 利用者や家族の援助のためのコミュニケーション能力と、他職種協働による介護過程を展開できる能力を身につけている。 |
|---|

介護福祉学科では、上記のディプロマポリシーに「介護福祉士養成課程における修得度評価基準としてのコアコンピテンシー」(公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会、2019年3月)を適用する形で評価の観点を作成した。項目1~13がポリシーの2に、14~17がポリシーの3に対応しており、結果的にディプロマポリシーの1に対応する観点は含まれなかった。

介護福祉学科の学生数は1年生が21名、2年生が10名であり、回収率・有効回答率ともに100%であった。全17項目の評価の観点と各項目の評価基準および1・2年生の結果を次ページ以降に示す。

回答者数が少なく、カイ二乗検定を適用できないため、評価基準の2~4段階の回答をひとつにまとめてFisherの正確検定を実施したところ、回答のばらつきに学年による違いが認められたのは⑫医療的ケア($p=0.015$)、⑮アセスメント力($p=0.001$)、⑰協働する力($p=0.002$)の3項目であり、2年生の方が2~4段階の評価基準を多く選んでいることが確認できた。

(2)教育活動の見直し

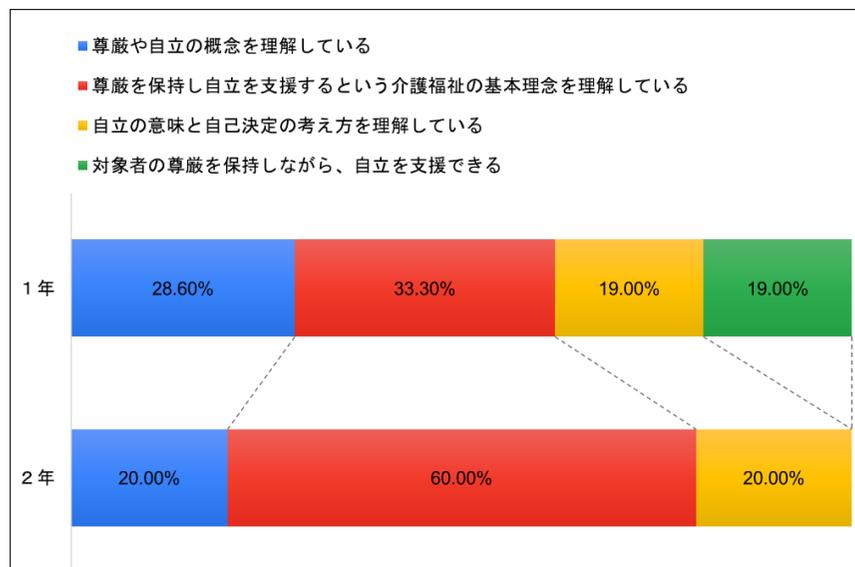
学年差が見られた項目については、幼保の場合と同じく実習や実践的な演習の成果と考えられる。体験的な学習を繰り返し実施することで、専門職者として根拠に基づいた介護実践の重要性や協働することの意義の理解が深まったものと推察される。

一方、これ以外の項目では有意差が見られず、中には1年生の方が高い評価基準を多く選んでいる項目もあった。これについては、カリキュラム基準の文言を学生が十分に理解していない可能性もあり、今後の結果も見て調査を改善する必要がある。

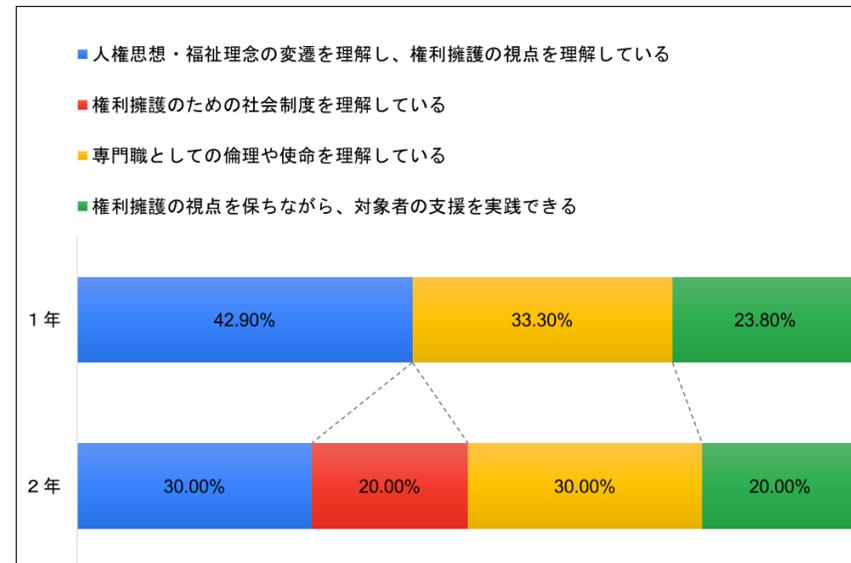
教育の改善方法としては、学年差が見られた演習系の科目の要素を強化することが考えられる。演習や実習には、実践的な内容である、解決すべき事項が明確である、自ら計画を立てて学習に臨む必要があるなどの特徴がある。難しい問題ではあるが、講義系の科目の履修においても、こうした取り組みを取り入れていくことも検討していきたい。

介護福祉学科の評価項目は介護福祉士養成におけるコアコンピテンシーと絡めて作成したため、今回の調査は本学のカリキュラムが介護福祉士養成のどのような側面とつながっているのかを明確化する良い機会ともなった。各科目の教員がそれを意識して教育を行うのはもちろん、学生にもそれが伝わるようシラバスや授業内容の工夫が求められる。

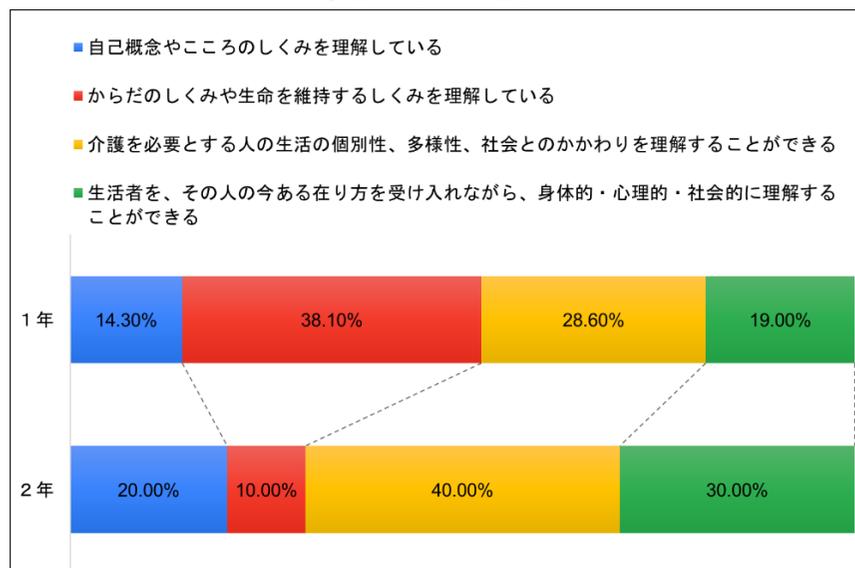
① 尊厳・自立の理解と支援



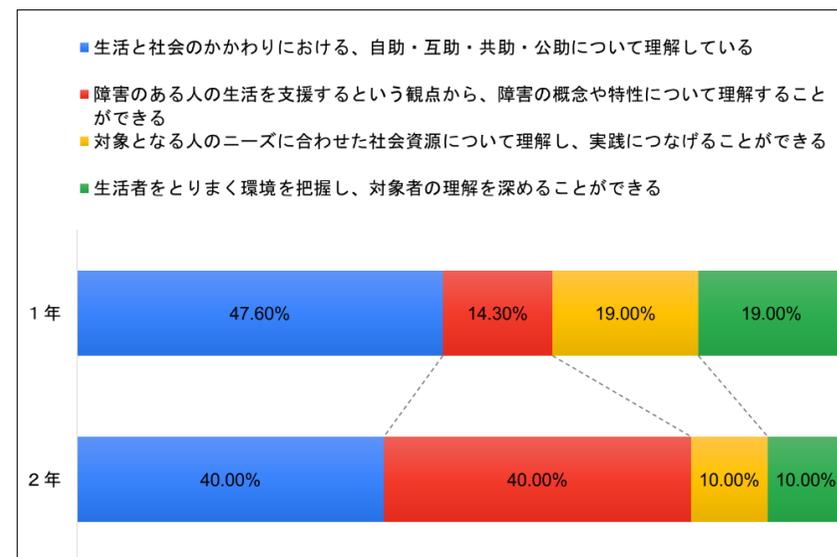
② 権利擁護



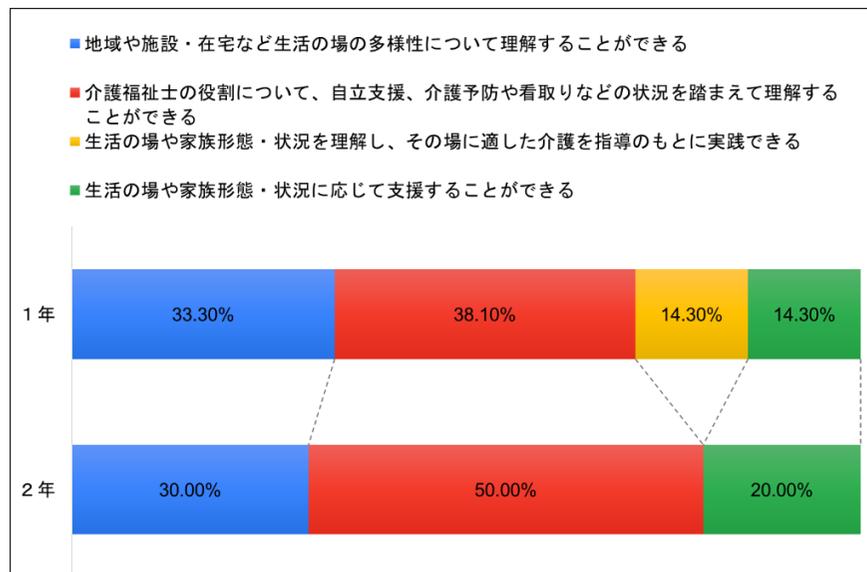
③ 心と身体を理解



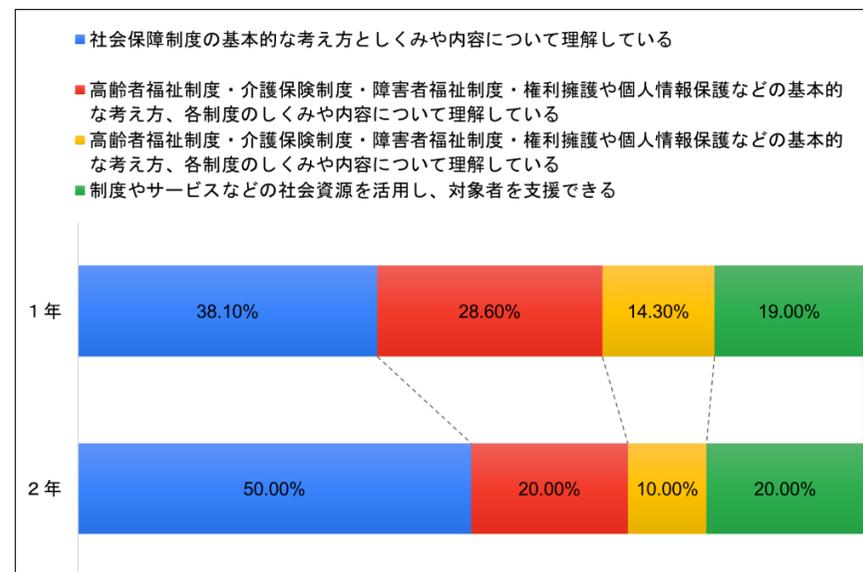
④ 社会との関わりを理解



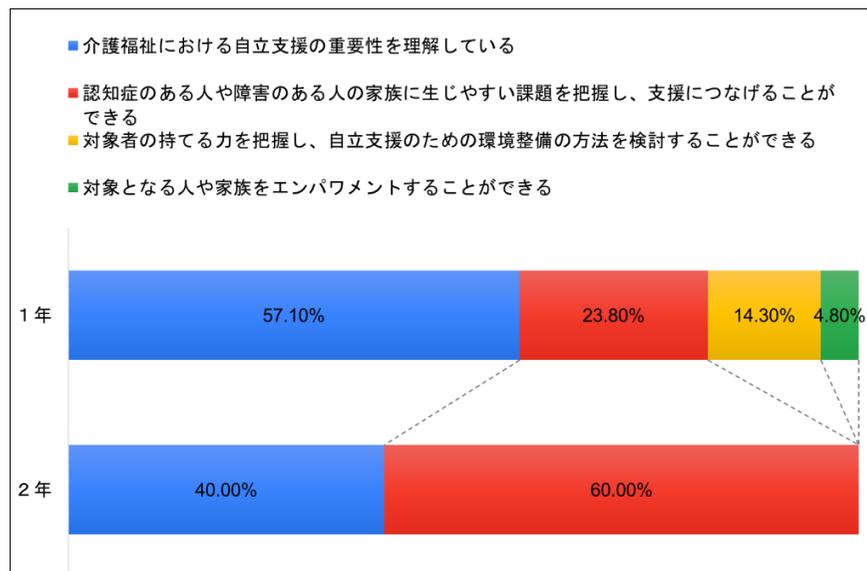
⑤生活の場に応じた支援



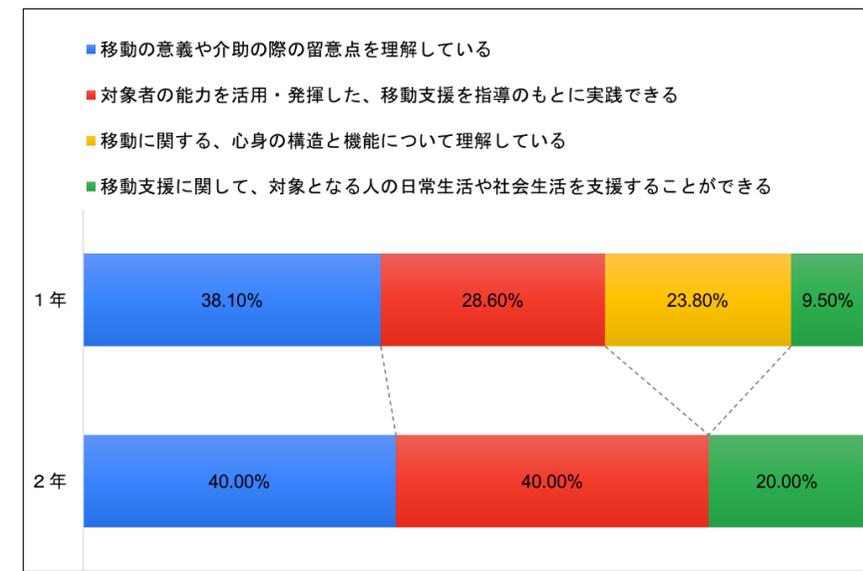
⑥制度に基づいた支援



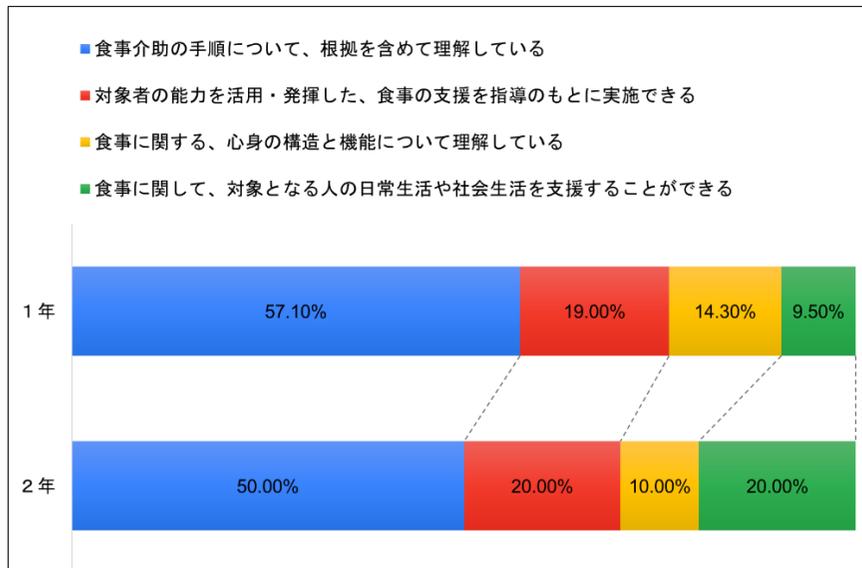
⑦自立支援



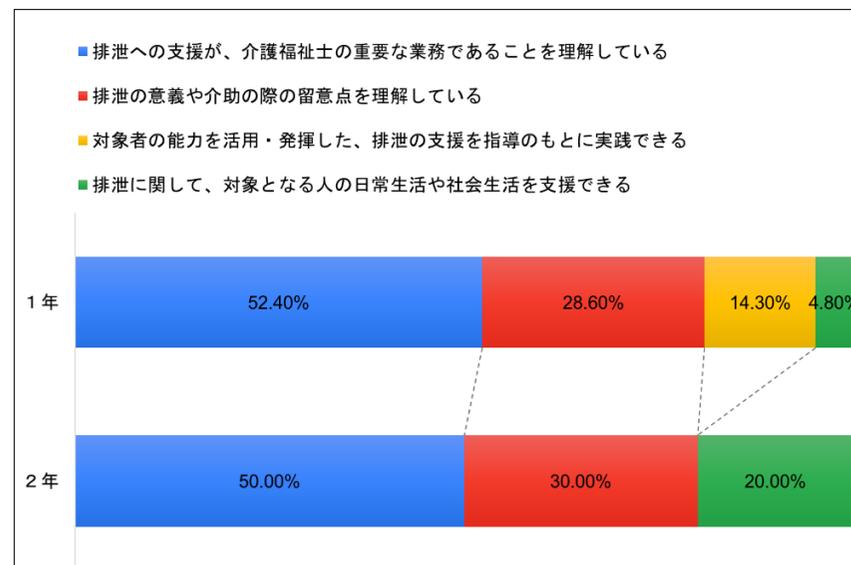
⑧移動支援



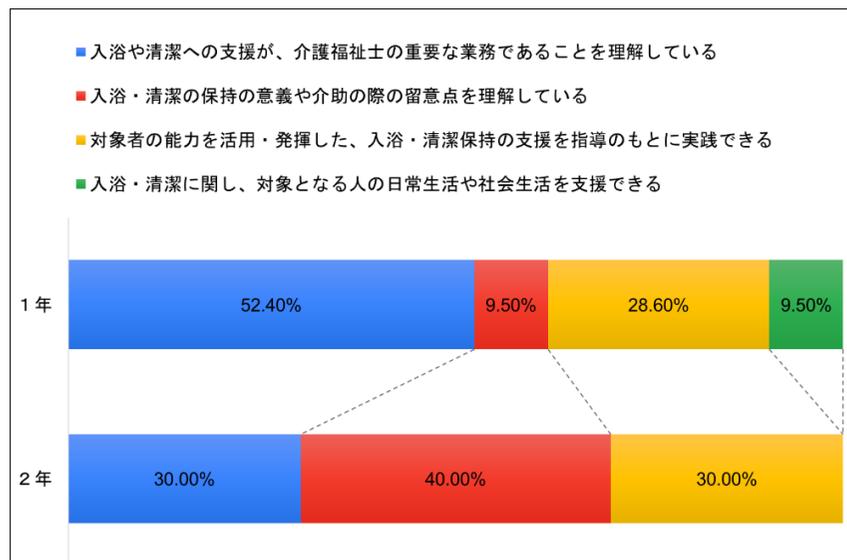
⑨ 食事支援



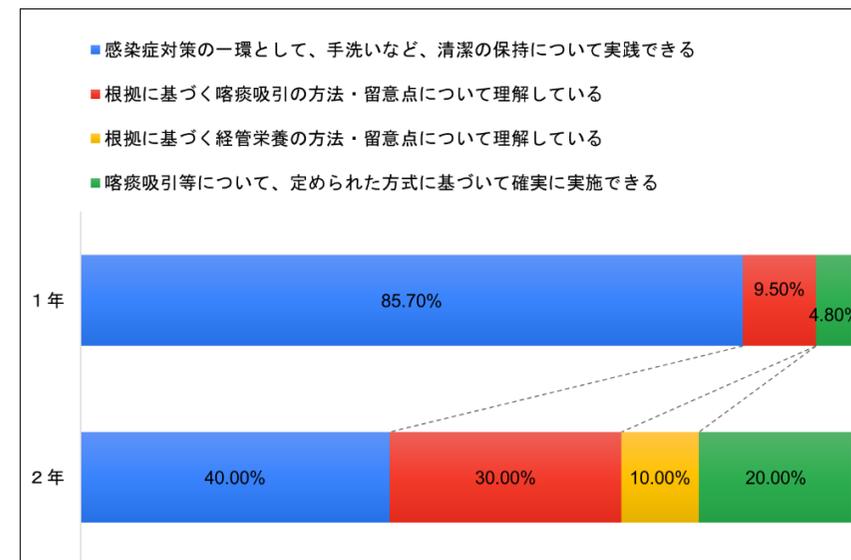
⑩ 排泄の支援



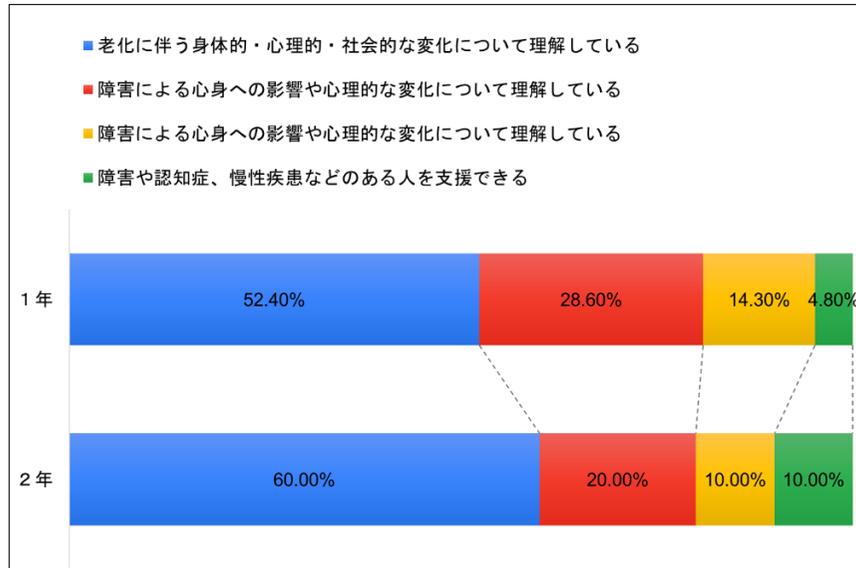
⑪ 入浴・清潔の支援



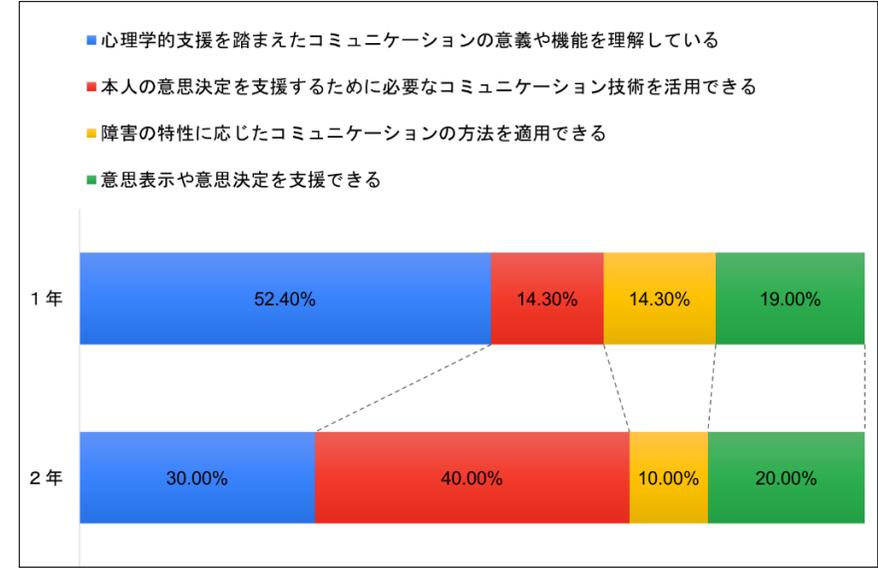
⑫ 医療的ケア



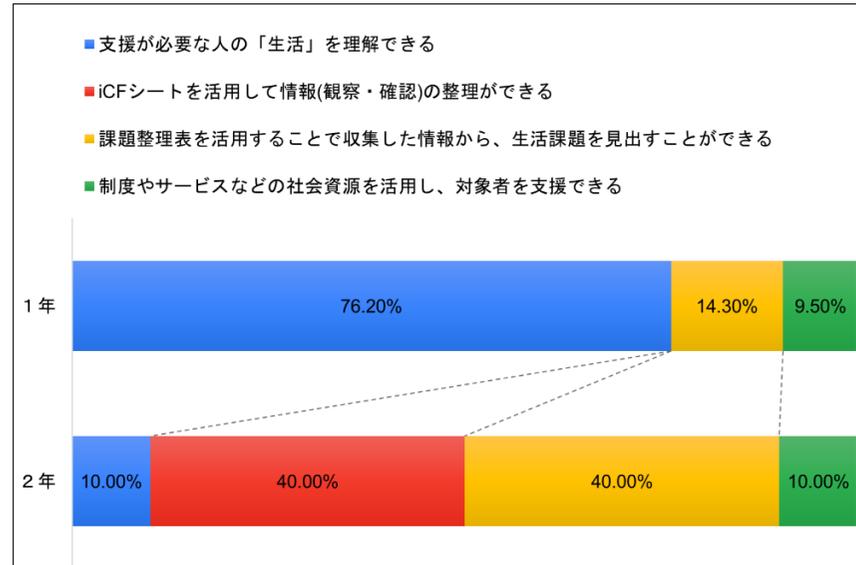
⑬ 老化・障害の理解と支援



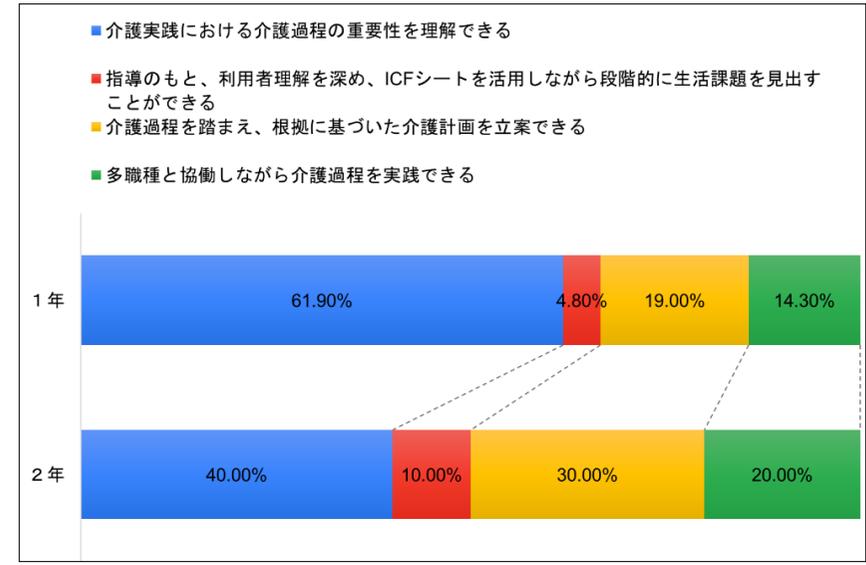
⑭ コミュニケーション技術



⑮ アセスメント力



⑯ 介護計画



⑰協働する力

- チームで働くために必要なリーダー、フォロワーの役割と留意点を理解している
- 認知症や障害のある人の生活を地域で支えるためのサポート体制や、多職種連携・協働による支援の基礎的な知識を理解している
- チームで介護過程を展開することの意義や方法を説明できる
- チームの一員としての役割を自覚し、協働することができる

